

研究発表もうしこみフォーム

氏名：春花

氏名のローマ字表記：Chunhua

所属：中華人民共和国・故宮博物院・研究館員

専門分野：満蒙文古籍編纂刊刻史

発表のタイトル：清の乾隆帝のモンゴル語学習とその掌握程度について

発表要旨（600字～800字程度）：

清の乾隆帝のモンゴル語学習とその掌握程度について（要旨）

春花（中華人民共和国・故宮博物院・研究館員）

清朝の乾隆帝は、清朝が入関してから4代目の皇帝であり、満洲皇帝として60年の在位中に多民族統一を成し遂げた「十全老人」であった。本報告は、清代の史料に依拠しつつ彼がモンゴル語を習得した理由と習熟度について考証するものである。

乾隆帝は、多民族統一国家を強化・発展させるために、他民族の先進文化を吸収・継承することに細心の注意を払った。満州語と漢語に堪能だけでなく、モンゴル語、チベット語、ウイグル語などの民族言語をも習得した。言語戦略を活用して各民族を懐柔しようとしたのである。彼がモンゴル語に堪能になったのは、彼自身の政治的意識に加えて、清廷が設置した「上書房」においてモンゴル語科目が開設されたこと、東巡して先祖を崇拝したこと、外藩からの毎年の朝覲、木蘭囲場での秋の狩猟体験、言語的才能と嗜好、自ら読経に親しんだことと密接な関係がある。

乾隆帝はモンゴル語に熟達していると自ら何度も述べている。例えば、乾隆七年に編纂された『満蒙話条』（二巻、清佚名輯、清内府精写本。故宮博物院図書館蔵）に「我已学会了蒙古语，翻译不用纳延泰你了（我れはすでにモンゴル語を身につけており、ナヤンタイ、汝に翻訳させるに及ばない）」とあり、また、『清高宗御製詩四集』巻10に、乾隆三十八年作「上元灯詞有序」の第三首の自注に「蒙古・回語皆習熟，弗藉通事譯語也（モンゴル語とウイグル語に習熟し、通訳に依ることはない）」と言っている。

史料では、乾隆帝がモンゴル語で諭旨を発したり、人々とモンゴル語で会話した記録もある。例えば、『雍和宮満文档案譯編』に、乾隆十三年四月十三日、ジュンガルの使臣たちの会話として、「安几達が皇帝のモンゴル語が上手であると言っていたが、昨日、皇帝に朝見する際に、突然皇帝がモンゴル語で諭旨を降したので甚だ驚いた」とある。乾隆四十五年（1780年）十月三日、乾隆帝が紫禁城の養心殿でパンチェン・ラマ6世に会ったときも、モンゴル語で話したのであった。モンゴル語年代記『アルタン・エリへ』（1817年）に、
それより[乾隆帝はパンチェン6世を]弟子たちと共に養心殿という内宮に招き、吉祥聖安を述べ、茶菓を賜い、諭旨を交わす際に[パンチェン6世の]ソイウォンとハムバ

たちはモンゴル語に訳し、久しく留まられ…
と描写されている。

総じて、乾隆帝は幼い頃からモンゴル語を学び、即位後は『満蒙話条』や『蒙古語』などの「字書」を利用してモンゴル語を習得したのである。これは彼自身の言語の才能と好みによるものであり、より重要な理由は「満蒙連盟」、「同文之盛」政策の効果的な実施を促進するために、モンゴルの上流階級との関係を深めることであった。彼がモンゴル語仏教経典を暗唱したのも、チベット仏教を利用してモンゴル地区を効果的に支配するという目的を達成するためであった。